第49回
ワルシャワ／ポーランド
Warsaw Poland

ポーランドという“地雷”
——蹂躙（じゅうりん）され続けるワルシャワの悲劇

リクルート=スタディサプリ講師　村山 秀太郎

最も紛争に近づいた！

2025年９月９～10日、ロシアの無人機多数がポーランドの領空を侵犯した。ポーランドのトゥスク大統領は「第二次世界大戦以来、最も紛争に近づいた」と訴え、NATO（北大西洋条約機構）の緊急会合の開催を要請した。ロシアがウクライナに対して大規模な空爆を実施し、その標的がポーランド西部国境近くに及んだことを受け、ポーランド軍は20日未明、戦闘機を緊急発進。この数時間前には、NATOがエストニア上空でロシア軍機３機に対応した。

ポーランド軍によれば、戦闘機２機が緊急発進したほか、地上の防空システムと偵察システムが最大限の即応態勢に移行したという。ポーランド軍は、ベラルーシやロシアの飛び地カリーニングラード（旧ケーニヒスベルク）との国境で監視カメラや音響探知機など対無人機システムの構築を急いでいる。

世界が激震する震源地

ポーランドは世界と世界史が激震する震源地であり、第二次世界大戦もここから始まった。

第一次世界大戦のヴェルサイユ条約で、「ドイツ人が建設し、住民の９割をドイツ人が占める街ダンツィヒ（現グダニスク）は、国際管理となり港湾使用権はポーランドにある」とされた。

1939年にヒトラーは、ヴェルサイユ体制が標榜（ひょうぼう）する「民族自決」原則を根拠に、ダンツィヒの返還を要求する。ダンツィヒ返還とともに、もう一つヒトラーが要求した「『ポーランド回廊』にダンツィヒとドイツ本土を結ぶ専用の通行路を建設し管理すること」も、ポーランドにとっては、必ずしものめない要求ではなかった。

だが、前年の中間選挙で大敗していたF・ローズベルト米国大統領にとってポーランドはまた違う意味をもっていた。恐慌対策「ニューディール政策」の失敗を“糊塗（こと）”する最後の手

ポーランド回廊付近拡大図と周辺の状況（1922年当時）